

記事で見る20年の歩み

04.12.22 日本工業新聞
インドネシアに教育助成
大阪ガス国際交流財団

東南アジア、オセアニアの天然ガス産出国を支援するため、今年九月に設立された大阪ガス国際交流財団（理事長・大西正文・大阪ガス会長）は二十一日、初年度の事業としてインドネシアの学校を対象に教育機材や奨学金などの助成を行うと発表した。助成総額は一千五百二十万円。二十三日にLNG（液化天然ガス）出荷基地のある同国カリマンタン島とスマトラ島で贈呈式を行う。

同財団は、天然ガス産出国との相互理解を深め、長期的なガス安定供給を確保するため、大阪ガスが基本財産三億円を全額出捐して設立。今年度は、大阪ガスへの最大の天然ガス輸出国であるインドネシアの小学、中学校、大学に対し、学校教育や天然ガス関連技術の助成を実施する。

今後は、インドネシア以外のガス産出国への支援も含め、助成内容の拡大を検討する予定。

1992年 12月22日付 日本工業新聞

04.12.22 産経新聞
大ガス財団が助成
大ガス財団が助成
大ガス財団が助成

大ガス財団は今年九月、天然ガス産出国への助成を目的として、大阪ガスが基本財産三億円を出し、設立した。初年度の助成は、ジャカルタのダルマ・プルサダ大学、東カリマンタン州のジャカルタ・小・中・高校七校、北アチエ州のスマウエの中・高・商業高校五校に教育機材、北アチエ州のジャワラ大学などの奨学金、バンドンのバンドン工科大学などに試験研究費を贈呈する。

大ガス財団は、天然ガス産出国との相互理解を深め、長期的なガス安定供給を確保するため、大阪ガスが基本財産三億円を全額出捐して設立。今年度は、大阪ガスへの最大の天然ガス輸出国であるインドネシアの小学、中学校、大学に対し、学校教育や天然ガス関連技術の助成を実施する。

今後は、インドネシア以外のガス産出国への支援も含め、助成内容の拡大を検討する予定。

1992年 12月22日付 京都新聞

1992年 12月23日付 日刊工業新聞

4.12.22 奈良新聞
インドネシアの教育機関を助成
大阪ガス財団
1千500万円
大阪ガス財団

大阪ガスが天然ガス産出国を支援するため設立した「大阪ガス国際交流財団」（理事長・大西正文・同社社長）は二十一日、インドネシアの教育機関に計約一千五百万円を助成する、と発表した。

同財団は九月、大阪ガスが基本財産三億円を全額拠出して設立した。

ジャカルタのダルマ・プルサダ大学など計二大学十二小中高校に地図、タイプライタなどの教育機材を寄付。また約八十人の高校生、大学生に一人一月平均一万七千五百円（約一千二百円）一四万二千円（約二千九百円）の奨学金を支給する。

同財団は九月、大阪ガスが基本財産三億円を全額拠出して設立した。

1992年 12月22日付 奈良新聞

04.12.22 産経新聞
大ガス財団が助成
大ガス財団が助成
大ガス財団が助成

大ガス財団は今年九月、天然ガス産出国への助成を目的として、大阪ガスが基本財産三億円を出し、設立した。初年度の助成は、ジャカルタのダルマ・プルサダ大学、東カリマンタン州のジャカルタ・小・中・高校七校、北アチエ州のスマウエの中・高・商業高校五校に教育機材、北アチエ州のジャワラ大学などの奨学金、バンドンのバンドン工科大学などに試験研究費を贈呈する。

大ガス財団は、天然ガス産出国との相互理解を深め、長期的なガス安定供給を確保するため、大阪ガスが基本財産三億円を全額出捐して設立。今年度は、大阪ガスへの最大の天然ガス輸出国であるインドネシアの小学、中学校、大学に対し、学校教育や天然ガス関連技術の助成を実施する。

今後は、インドネシア以外のガス産出国への支援も含め、助成内容の拡大を検討する予定。

1992年 12月22日付 産経新聞

1993年 2月24日付 日刊工業新聞



初年度はインドネシアの小学校に教育機材を提供した

大ガスは、東南アジアやオセアニアの天然ガス産出国との相互理解を深めるため、今年九月に「大阪ガス国際交流財団」を設立した。国際貢献や共生の観点から、都市ガスの原料である天然ガスを利用している国に対して、将来国を支える人材育成を支援し、より一層理解を深めるのが主目的。

財団の主要事業は、小学校、中学校、高校、大学を対象とした教育機材提供、奨学金の支給、天然ガス関連技術に関する研究助成、教師、技術者の研修など。また、天然ガス産出国の発展に貢献するため、大阪ガスの領土・領海・領空の拡大を図る。

大ガスは、今年九月に設立した「大阪ガス国際交流財団」の初年度事業として、インドネシアの小学校に教育機材を提供した。初年度の事業は、ジャカルタのダルマ・プルサダ大学など計二大学十二小中高校に地図、タイプライタなどの教育機材を寄付。また約八十人の高校生、大学生に一人一月平均一万七千五百円（約一千二百円）一四万二千円（約二千九百円）の奨学金を支給する。

同財団は九月、大阪ガスが基本財産三億円を全額拠出して設立した。

天然ガス産出国の人材育成を支援

大ガスは、今年九月に設立した「大阪ガス国際交流財団」の初年度事業として、インドネシアの小学校に教育機材を提供した。初年度の事業は、ジャカルタのダルマ・プルサダ大学など計二大学十二小中高校に地図、タイプライタなどの教育機材を寄付。また約八十人の高校生、大学生に一人一月平均一万七千五百円（約一千二百円）一四万二千円（約二千九百円）の奨学金を支給する。

同財団は九月、大阪ガスが基本財産三億円を全額拠出して設立した。

Osaka gas presents Rp.75.5 million in assistance for education, research

By Our Reporter

The Osaka Gas Foundation of International Cultural Exchange (OGFICE) yesterday presented Rp.75,500 million in assistance to a number of Universities.

The presentation took place at the Hotel Borobudur and was attended by the Director General of Higher Learning Institutions, Sukadji Ranuwihardjo, and Pertamina President Director F. Abda'oe.

The foundation assisted Darma Persada University with educational equipment worth Rp.32 million, research funds to the institute of Technology Bandung, of Rp.18 million, research funds to the Bogor Agricultural University of Rp.18 million and scholarships to Mulawarman and Sjah Kuala Universities valued at Rp.8.750,000 each.

Assistance will also be given to junior and senior highschools in Lhokseumawe and Bontang. The foundation will give assistance to educational institu-

tions this year totalling Rp.220 million.

OGFICE, wholly funded by Osaka Gas, was established in September this year. Its objectives call for assisting natural gas producing countries in Southeast Asia and Oceania by providing schools with educational equipment, scholarships, and funds for natural-gas related research.

This year's assistance is directed to Indonesia, the

largest supplier of LNG for Osaka Gas. Assistance for educational equipment will be awarded to 12 schools of elementary and secondary level and to one university in Lhokseumawe and Bontang, scholarships to high schools and two universities in two areas, and research funds to two universities. OGFICE plans to study the possibilities of expanding the scope of its activities in the future. (Sp/07)

1992年 12月22日付 THE INDONESIA TIMES

「大阪ガスが教育、研究の為に7500万ルピアを贈呈」

大阪ガス国際交流財団(OGFICE)は昨日いくつかの大学に対し、7550万ルピアを贈呈した。

贈呈式はボルブドールホテルで行なわれ、スカルジ高等教育総局長、プルトミナのアブダウ総裁が列席した。

基金の内容は、ダルマブルサダ大学へ3200万ルピア相当の教育機器、バンドン工科大学及びボゴール農業大学へそれぞれ1800万ルピアの研究資金、ジャクワラ大学への875ルピアの奨学金となっている。

又ボンタン及びロクスマエの中学、高校に対しても補助金が送られる予定である。同財団の本年の教育機関に対する援助は総額2億2000万ルピアになる予定である。

OGFICEは本年9月に大阪ガス単独で設立され、学校に対し、教育機器、奨学金、天然ガス関連研究資金を提供することにより東南アジア、オセアニアの天然ガス生産国を補助することが目的となっている。

本年の補助は、大阪ガスに対する最大のLNG供給国であるインドネシアに向けられたものでボンタン及びロクスマエの12の小中学校及び1つの大学に対し教育機器、いくつかの高校2つの大学に奨学金、2つの大学に研究資金が送られる予定で、OGFICEは今後さらに活動内容の拡大の可能性を検討する予定である。

日本企業の海外進出はめざましい。最近では急速な円高も加わって、生産拠点を海外へ移すケースが増えてきた。中には安い人件費が目当てという企業もある。コストの低い国から国へ、渡り鳥のように拠点を移していく企業も少なくない。しかし、そうした進出の在り方はこれからの、世界の中の日本を考へる時、反省すべき時期を迎えている。日本が国際的に信頼される国家となるためには、これから様々な分野で努力が必要だが、とりわけ海外へ進出している企業の果たす役割が大きい。経済的に地元におけるおれをもたらずと同時に、社会的にも地域の一員として受け入れられることが不可欠となる。折から日本企業への国際的な風当たりが強まってきた。地域への貢献活動は、経費ではなく、むしろ先行的な投資としてとらえる柔軟な発想が求められ始めた。貢献活動を戦略的観点からとらえなおすことが大切な時代を迎えたといえる。家電最大手企業の松下電器産業、合繊最大手の東レ、電力・都市ガス業界で国際化への対応が最も進んでいるといわれる大阪ガス三社に、先進的な事例を探った。三社ともに、海外での貢献活動に一本の大きな背骨が通っているのが特徴。現地での評価が高い。

天然ガスの産油国 へ人材育成の協力



ムラワリルマン大学の奨学生たちと歓談する諏訪専務理事



ボンタン地区の奨学生と父親、先生

大阪ガス

大阪ガスは、東南アジアやオセアニアなど天然ガス産出国との相互理解を深めるため、九二年に「大阪ガス国際交流財団」を設立、人材育成を中心とした国際貢献活動に取り組んでいる。これまでの、天然ガスの売買という経済的な関係を超えて、共生、国際貢献の観点から、相互の信頼関係を築こうというのが狙い。

財団の主な事業は①小学校、中学校、高校、大学などを対象とした教育機材の提供②高校、大学の学生を対象とする奨学金の支給③天然ガス関連技術に関する研究助成④教師、技術者および研究者の研究に対する助成—など。

活動は、顔の見える国際貢献を旨とし、将来国を支える人材育成を基本にしている。基本財産の六億円は全額、大阪ガスの出損。設立は九二年九月と、まだ間もないが、現地の教育関係者からは高い評価を得ている。

「お金を出して、研究所やホールなどのハードを提供する方法もあるが、金額は少なくとも現地に現地の人に喜ばれることを、現地の人と一緒に考えた」（諏訪秀行専務理事）という。

提供する機材の一つひとつ、奨学金の支給対象者など、助成内容の決定にあたってはすべて、助成先の教育関係者の協力を得て運営されている。

「現地の実情にあった協力は、時間がかかるが本当に喜んでもらえる」（同氏）と話す。

事務局には、一年目からインドネシアの奨学生から感謝の手紙が多数寄せられている。また、自由課題による作文も届けられており「今後、日本の学生たちとも、このような作文の交換を通じて、両国学生の相互理解と交流促進ができれば」（同氏）と、期待をかける。

1993年 11月17日付 日刊工業新聞

Yayasan Osaka Gas Serahkan Bea Siswa dan Alat Musik Untuk Jatah SMPN, SMAN dan SD

Bontang, MANUNTUNG

Yayasan Osaka Gas Jepang, tahun ini kembali menyerahkan sumbangan berupa 1 set buku ensiklopedia bahasa Indonesia, kamus bahasa Inggris serta peralatan musik seperti gitar, piano, gendang dan seruling kepada SMP/ SMA Negeri I Bontang. Tahun lalu Osaka Gas memberikan bantuan berupa...

Selain itu, diserahkan pula beasiswa kepada 20 siswa kelas I dan II SMA Negeri I. Masing-masing siswa memperoleh Rp. 20 ribu/bulan atau Rp. 240 ribu/tahun. Penyerahan beasiswa tersebut berlangsung di ruang laboratorium, Gedung SMA Negeri I Bontang.

Kecuali beasiswa, sumbangan berupa juga diberikan Yayasan Osaka Gas kepada 5 buah SD masing-masing, SD 006 Berbas Ulu, SD 003 Berbas Tengah, SD 005 Berbas Tanjung, SD 010 Tanjung Laut dan SD 009 Kanaan.

Sumbangan peralatan sekolah tersebut diserahkan, Executive Director Osaka Gas International Cultural Exchange, Hideyuki Suwa kepada Kepala Sekolah SMA Negeri I Bontang, Drs Abdul Muis disaksikan Sekretaris Kotif Bontang Drs A Maslihan Hasan, Kepala Kantor Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Kecamatan, Wagiman serta Muspida Kotif Bontang.

Keseluruhan sumbangan per-

alatan sekolah yang diberikan untuk sekolah-sekolah di Bontang itu bernilai Rp 54 juta di luar beasiswa untuk 20 siswa SMA Negeri I Bontang tadi yang juga diserahkan oleh Suwa.

Dari 20 siswa SMA Negeri I yang menerima beasiswa dari Osaka Gas asal Jepang tadi terdiri dari kelas I dan II. Untuk kelas II masing-masing, Mansyur, Wahid, Budi, Isnaini, Asuransyah, Lince Nainggolan, Susana, Bambang Sutrisno, Wahyuningsih, Rabainah, Eko, Supriyanto dan Siti Jainab.

Sedang penerima beasiswa di kelas I adalah, Rijal, Rose Hamsky, Sidik Purnomo, Lili Rahayu, Suhendi, Ery Suharmoko, Slamet Siahaan, Yuli Retnowati dan Haerah Mustari. Mereka ini menerima beasiswa dalam bentuk cek. Hideyuki Suwa mewakili Ketua Yayasan Osaka Gas, Masafumi Ohnishi, dalam sambutannya mengatakan, sebelum sumbangan tersebut diserahkan ke sekolah-sekolah pihak yayasan terlebih dulu melakukan survei mengenai jenis sumbangan yang dianggap paling tepat.

Tanpa survei dikhawatirkan sumbangan tadi tidak tepat pada sasaran yang diinginkan. "Melalui PT Badak, NGL Co selaku mitra kerja Osaka Gas, kami dapat mengetahui jumlah siswa dan sekolah yang layak menerima sumbangan dari Osaka Gas," kata Suwa dalam ba-

hasa Jepang yang diterjemahkan oleh Fontoh selaku interpreter (juru bahasa).

Dikatakan, Osaka Gas telah mengalokasikan dana sebesar Rp 250 juta untuk menyumbang beberapa buah sekolah di Indonesia dalam tahun pelajaran 1993-1994. Sumbangan tersebut kata Suwa dibagikan dari tanggal 13 s/d 25 Oktober tahun ini.

Menurut Suwa Yayasan Pertukaran Kebudayaan Osaka Gas tersebut baru berusia setahun. Untuk itu katanya, yayasan belum banyak berbuat namun hal itu akan terus ditingkatkan di tahun mendatang.

Yayasan yang mensuplai Gas ke bagian barat Jepang, menurut Suwa sudah 15 tahun mengikat kontrak penjualan gas dengan Indonesia. Dan selama itu Jepang merasa sangat puas atas kerjasama Indonesia khususnya PT Badak NGL Co. Sebagai tanda terima kasih atas kerjasama yang baik itu, Osaka Gas mendirikan yayasan yang berorientasi program pertukaran kebudayaan.

Osaka Gas tidak hanya memberikan sumbangan bagi sekolah tingkat dasar dan menengah tapi juga beberapa universitas dan akademi. Penyerahan kemarin disaksikan Administration Div, Manager PT Badak NGL Co, HM Syafei, Ka Humas PT Badak NGL Co, Sardjjan Yusuf dan sejumlah staf. (rr)

1993年 10月20日付
MANUNTUNG紙

「大阪ガス財団、
奨学金と楽器を贈呈」

大阪ガス財団は、今年もボンタンの中学校、高等学校に対し、インドネシア語の地図、英語の辞書、ギター、ピアノ、太鼓等の楽器を寄贈した。昨年も大阪ガスは同様の寄贈を行っている。その他に、20人の高校1年と2年生に対する奨学金も贈呈した。それぞれの生徒が、月額2万ルピア(年額24万ルピア)を受け取ることになる。この奨学金の贈呈式は、ボンタン高等学校の研究室で行われた。

奨学金の他に、大阪ガス財団より、5つの小学校(Berbas Ulu, Berbas Tengah, Berbas Tanjung, Tanjung Laut, Kanaanの各小学校)に対しても寄付があった。

上記の学校に対する寄付は、大阪ガス国際交流財団の専務理事である諏訪秀行氏より、ボンタン市のマシリ・ハサン氏、地元の教育文化省の局長であるワギマン氏らの立会いのもと、ボンタン高等学校の校長であるアブドゥル・ムイス氏に対して行われた。

20人の奨学生に対する奨学金以外の、5400万ルピアにものぼる今回の贈呈は諏訪氏によって行われた。

大阪ガスから奨学金を受けているボンタンの高校生は、1年生と2年生からなる。2年生は、マンシユル・ワヒッド、ブ

ディ・イスナワン、アスランシャ、リン・ナインゴラン、スサナ、バンバン・ストリスノ、ワハユニシ、ラバニナ、エコ・スプリヤント、そしてシティ・ジャイナブである。また1年生は、リジャル、ロセ・ハムスキー、シディック・ブルノモ、リ・ラハユ、スヘンディ、エリス・ハルモコ、スラメット・シアハアン、ユリ・レトノワティ、そしてハエラム・スクリである。彼らは小切手の形で奨学金を受け取る。

諏訪氏は大阪ガス財団会長の大西氏の代理で、挨拶のなかで、「学校に対し、このような寄付を行う前に、財団は、まずはじめに、どのような寄付が一番よいのかという調査を行った。」と語った。

調査無しには、先程の寄付も外的なものになる懸念がある。諏訪氏は、「PTバダックを通じ、大阪ガスからの寄付を受けた全ての生徒や学校を知ることが出来た」と、ボント氏の通訳を通して日本語で語った。

大阪ガスは1993年度に、インドネシアの学校に対し、2億5千万ルピアの基金を計上したと言われている。この寄付は、10月13日から25日にわたって行われる。

諏訪氏によれば、この大阪ガス国際交流財団は、1周年を迎えたばかりであり、まだ大きなことは行っていないが、将来的には活動を広げていきたいとのことである。

大阪ガスは日本の西部地域にガスを供給しており、インドネシアと売買契約を結んで15年が経過した。その間、日本は、インドネシア、とりわけPTバダックとの取引に非常に満足している。この感謝のしるしとして、大阪ガスは文化交流を目的とする財団を設立した訳である。

大阪ガスは、小・中学校、高校に対する寄付だけではなく、大学やアカデミーに対しても寄付を行っている。

昨日の贈呈式にはPTバダックの総務本部長であるHMシャフエイ氏、および広報課長のサルジアン・ユスフ氏をはじめ、全スタッフが列席した。

No. 3, 4

Serambi Indonesia

JUMAT 20 OKTOBER 1995 .5

Osaka Gas Jepang Beri Beasiswa untuk 42 Siswa

□ 8 SEKOLAH DAPAT BANTUAN PERALATAN

Serambi-Lhokseumawe

Direktur Eksekutif Yayasan Osaka Gas Jepang, Minoru Wakasaka, Rabu petang lalu, menyerahkan bantuan beasiswa kepada 42 siswa SLTA berprestasi, serta bantuan peralatan pendidikan senilai Rp 52 juta kepada 8 sekolah di Kabupaten Aceh Utara.

Pemberian seperti itu merupakan yang keempat, sebagai wujud dari kepedulian masyarakat Osaka, Jepang yang banyak menggunakan gas asal Ladang Aron, Aceh Utara. "Silaturahmi seperti ini bukan saja penting, tapi juga harus tetap berlanjut," kata Minoru Wakasaka setelah menyerahkan bantuan tersebut secara simbolis di

Sanggar Kegiatan Belajar (SKB) Lhokseumawe.

Sementara itu, General Manajer PT Arun, Ir Hariadi Soemantri menyebutkan, sebagai perusahaan, PT Arun hanyalah sebagai jembatan (katalisator) antara masyarakat Jepang di Osaka dengan masyarakat Aceh Utara, tempat di mana kandungan gas terbesar dieksplorasi, kemudian diekspor ke berbagai negara. Dalam kedudukannya sebagai katalisator tersebut, PT Arun mendapat tawaran dari masyarakat pengguna gas di Jepang untuk bersilaturahmi dan beraudiensi dengan masyarakat Aceh Utara. Maka,

kemudian niat untuk sekadar beraudiensi tadi melebar menjadi tekad pihak Osaka memberikan bantuan pendidikan bagi masyarakat Aceh Utara.

Selanjutnya, Osaka Gas Foundation of International Cultural Exchange (OGFICE) selama empat tahun terakhir memberikan bantuan belajar bagi peserta didik di Aceh Utara. Tahun ini, 42 siswa kurang mampu tapi berprestasi bagus, mendapat bantuan Rp 15.000/bulan untuk masa setahun, terhitung Juli 1995 hingga Juni 1996. Mereka yang mendapat beasiswa itu penyebarannya merata dari Samalanga hingga Pantan Labu (barat hingga timur Aceh Utara).

Adapun sekolah yang mendapat bantuan peralatan labor, olahraga, dan penunjang pendidikan masing-masing SMA 1 Lhokseumawe, SMA 2 Samalanga, dan SMA Jeunib. Selain itu adalah SMA 1 Matang geulumpang Dua, SMA Syamtalira Bayu, SMEA Negeri Peusangan, SMPN Kruceng Geukuch (yang kini dilanda musibah kesurupan-red), serta SMP 1 Pantan Labu.

Penyerahan bantuan tersebut disaksikan oleh pejabat dan tokoh-tokoh pendidikan di Aceh Utara, serta orangtua/walimurid yang anaknya beruntung mendapat beasiswa.

Pemda Aceh Utara, sebagai mana dikatakan Asisten I Set-

wilda mewakili bupati, sangat bersyukur dengan adanya bantuan dari Yayasan Osaka Jepang tersebut untuk pemajuan bidang pendidikan di Aceh Utara. "Ini bukti kepedulian Jepang sebagai negara maju terhadap kita di sini, agar menjadi motivasi supaya kita bisa lebih maju lewat pembangunan bidang pendidikan," kata Drs Ahmad Nasharuddin.

Kerja sama seperti ini diharapkan terus berlanjut dan bantuan yang diberikan pun hendaknya makin beragam, bukan cuma di bidang pendidikan. "Tapi juga di bidang penelitian," harapnya. (dik)

1995年 10月20日付 Serambi Indonesia (スランビ・インドネシア)

「大阪ガスは42人の学生に奨学生を与えた、8つの学校が設備、援助を受けた」

スランビ ロクスマウエ、脇坂専務理事は、北アチェにある8つの学校の優秀な学生42人に対し、水曜日の昼に奨学金、および52,000,000ルピアの教育機材を贈呈した。

この助成は、これで第4回目になる。大阪ガスが、このアルン地方からLNGを大量に購入しているのが所以である。このような関係は、単に必要なからというだけでなく、今後継続していかなければならないと、脇坂氏は述べている。

P. T.アルンのハルヤディ・スマントリ社長は、次のように述べた。P. T.アルンは、大阪における日本人と北アチェとの橋渡しの役目をした、と。

大阪ガス国際交流財団は、北アチェにおける援助を約4年間続けている。ちなみに今年は、40人の優秀であるが経済的に苦しい学生に対し、奨学金を助成した。金額は一人あたり、毎月15,000ルピアであった。期間は、1995年7月から1996年6月にかけての1年間である。

奨学金を受けた大学生は、サマランガ地方からパントウンラプにかけての、すなわち、北アチェの西から東へかけて住む者たちである。一方、学校の教育機材を贈呈された学校は、ロクスマウエ第一高等学校、サマランガ第二高等学校、そしてジュニブ高等学校である。その他、マタン・グルンバン・ドゥアの第一高等学校、サンタリラ・バユ高等学校、プサガン国立高等学校、クルエングク中学校とパントウンラプ第一中学校である。北アチェの教育関係者や役人、およびその奨学金を受けた生徒の父兄たちが、贈呈式においてその援助を承認した。

北アチェ地方政府は、北アチェの教育の発展のための大阪ガス国際交流財団の援助には非常に感謝していると述べた。ナサルディン氏（北アチェ県知事代行）は、この助成制度を教育分野で頑張らねば、という励みになるきっかけにしなければならないと語った。この援助は是非とも今後続けてほしいし、また他の分野への援助（研究分野に対して）をも期待していると語った。

WASPADA
SENIN, 23 OKTOBER 1995 [5]

The Osaka Gas Foundation Bantu SLTP dan SLTA Di Aceh Utara

● Bukan "Aceh Sepanjang Abad" Juga Dibagi-bagikan

LHOKSEUMAWE (Waspada): Yayasan The Osaka Gas Foundation Jepang pembeli terbesar LNG Arun Ngl Co tahun ajaran 1995/1996 membantu peralatan laboratorium dan alat-olah raga SLTP, SLTA untuk kabupaten Aceh Utara senilai Rp 53.800.000 yang diserahkan langsung direktur yayasan tersebut Monoru Wakisaka, di gedung SKB Lhokseumawe Rabu (18/10).

Disamping alat-alat laboratorium kimia, fisika dan alat-alat Olahraga/Kesehatan, The Osaka Gas Foundation, juga membantu bea siswa untuk 42 orang siswa SLTA di Aceh Utara masing-masing Rp 15000/siswa/bulan. Bantuan ini merupakan lanjutan bantuan tahun lalu, dimana 14 orang diantaranya sudah tammat, belajar di SLTA.

Menurut Ketua Yayasan The Osaka Gas Foundation disamping alat laboratorium dan Olahraga/Kesehatan, pihaknya juga membantu buku perpustakaan untuk SLTA, dimana di antara buku-buku sejarah yang telah dipelajarinya, buku "Aceh Sepanjang Abad" karangan sejarawan terkenal haji Mohd. Said cukup tinggi nilainya.

Untuk itu, menurut Minoru Wakisaka, pihaknya juga menyumbangkan masing-masing lima buku "Aceh Sepanjang Abad" untuk masing-masing SLTA guna untuk dipelajari dan dihayati bagaimana kiprahnya orang-orang Aceh di masa tempoe doelu.

Minoru mengaku, sudah lama mempelajari buku Sejarah Aceh tersebut, sehingga buku itu sudah ada di perpustakaan The Osaka Gas Foundation Jepang, Jilid I dan Jilid II, jelasnya. Adapun sekolah yang mendapat sumbangan buku Sejarah terbitan Harian Waspada Medan itu adalah SMAN 8 Samalanga, SMAN Jeunib, (SMAN Matang Geulumpang Dua, SMA Negeri Syamtalira Bayu, SMPN Krueng Geukueh, dan SMPN No. 1 Pantonlabu. Masing-masing Sekolah itu lima buah jilid I dan jilid II.

Menurut Ajudan (penterjemah) M. Wakisaka pada Waspada, buku Karangan HM. Said itu cukup menarik perhatian para sejarawan Jepang

dan hampir setiap perpustakaan besar di Jepang mempunyai buku Koleksi Aceh Sepanjang Abad jilid I dan II. Saat Waspada, memberitahukan Sejarahwan tiga zaman itu sudah meninggal, belum lama ini, pihaknya terkejut dan mengharapkan ada penggantinya. Walau orangnya sudah meninggal tapi karyanya masih hidup sepanjang zaman dan dikenal oleh dunia, katanya.

Sementara itu Ka. Kandepdikbud Aceh Utara Nurdin Ismail dalam sambutannya mengatakan, bantuan Tas Osaka Gas Foundation untuk pelajar di Aceh Utara sudah ratusan juta jumlahnya, dan bantuan tersebut telah dimanfaatkan seoptimal mungkin dalam meningkatkan mutu pendidikan di Aceh Utara. Terima kasih atas perhatian dan bantuan diberikan untuk memajukan pendidikan di Aceh Utara, katanya.

Bupati Aceh Utara yang diwakili Asisten I Drs. Haji Achmad Nasharuddin dalam sambutannya menjelaskan, Jepang sejak dulu sudah menjalin kerja sama yang baik dengan Indonesia bukan saja di bidang politik, tapi juga bidang sosial dan budaya. Hubungan dan kerja sama yang baik ini terus berlanjut, walaupun Gas LNG telah habis, harapnya hadir selain Muspida Aceh Utara, kepala SLTP/SLTA dan siswanya. (b12)

1995年 10月23日付 WASPADA (ワスパダ)

「大阪ガス国際交流財団は、北アチェの中学校、高等学校に援助を与えた」

「アチェ・スパンジャン・アバド(アチェ100年史)」の本も与えた

大阪ガスは、教育教材や運動具として北アチェへ、53,800,000ルピアを援助した。

それらは、水曜日に脇坂専務理事が直々に贈呈した。

その他の援助として、北アチェの40人の高校生に各々毎月15,000ルピアずつ奨学金を与えた。この援助は昨年の援助の延長である。現在、この援助を受けた14人の生徒たちが既に卒業している。その他にも、歴史学者であるモハammad・サイド氏の著書「アチェ・スパンジャン・アバド(アチェ100年史)」も贈呈した。この著書は高い評価のある本だと脇坂氏は賞賛していた。この本を配布した目的は昔のアチェの人々がどのような生活様式で暮らしていたかを再認識するためである。脇坂稔氏はさらに、以前よりこの本を読み、大阪ガスの図書館にもあると説明した。サマランガ第8国立高等学校、ジュニブ国立高等学校、マタングルンバン第2国立高等学校、パントンラプ第1国立中学校の各高校が5冊ずつこの本を受け取った。

脇坂氏はまた、日本の歴史学者たちはこの本に非常に関心を寄せており、日本国内の大きな図書館にも置いてあると述べた。しかしながら、脇坂氏は、その著者であるモハammad・サイド氏が既に亡くなっていると聞いて驚いていた。彼のような偉業を成す人物が早くこの世に再び現れることを期待する。著者は亡くなっても、この本は全世界で永遠に語り継がれていくであろうと、語った。

北アチェの文部省・教育委員会の局長、ヌルディン・イスマイル氏は次のように述べている。大阪ガス国際交流財団には、既に何億ルピアも援助していただいている。そしてその援助は、北アチェの教育の質の向上のために活用されている。北アチェの教育の発展のために心から感謝の意を表明したい、と。

北アチェ県の知事の代行として、アシスタントのハジ・アハammad・ナサルディン氏が次のように述べた。インドネシアと日本とは、以前から政治面のみならず社会面、文化面に於いてもお互いに協力しあっている。LNGの協力関係が終わっても、このつながりはずっと続けてほしい、と。

この贈呈式への出席者は、北アチェの役人と、中学校の校長、高等学校の校長、とそれぞれの学校の生徒たちである。

Suara Kaltim, Selasa, 24 Oktober 1995

Jepang Perlukan Energi Gas Alam

- Osaka Gas Foundation Beri Beasiswa

SAMARINDA: Jepang hingga kini masih sangat memerlukan energi berupa gas alam dari Indonesia. Melalui Osaka Gas Company saja misalnya, sekitar 70% gas alam dipenuhi dari kilang-kilang gas alam cair (LNG), dan lebih dari 50% berasal dari Badak, Bontang.

Direktur Eksekutif Osaka Gas Foundation of International Cultural Exchange, Minoru Wakisaka kepada *Suara Kaltim* usai penyerahan bantuan beasiswa untuk mahasiswa Universitas Mulawarman (Unmul) kemarin mengatakan, gas alam merupakan energi yang sangat berarti bagi kehidupan dan kegiatan-kegiatan rumah tangga serta industri di kota-kota Jepang.

Perusahaan pemasok gas alam dari Indonesia itu menurutnya memberikan pelayanan kepada sekitar 20 juta pelanggan yang tinggal seperti di kota Osaka sendiri, Kyoto dan Kobe serta beberapa kota besar lainnya di Jepang.

"Osaka Gas Company sebagai perusahaan gas terbesar kedua di Jepang, memulai kontrak kerjasama dengan Indonesia sejak tahun 1977 dan baru-baru ini dengan Pertamina juga telah ditandatangani kontrak kerjasama yang baru hingga tahun 2011 mendatang," kata Wakisaka.

Sebagai wujud kepedulian terhadap Indonesia, melalui yayasannya Osaka Gas Company memberikan bantuan berupa beasiswa bagi mahasiswa berprestasi. Selain itu, sesuai misi yayasan, juga diberikan bantuan berupa peralatan pendidikan seperti buku-buku wajib sekolah, kamus dan perlengkapan sekolah lainnya mulai dari tingkat SD sampai SLTA.

Yayasan itu menurutnya, juga memberikan bantuan dana penelitian untuk perguruan tinggi. "Jangka waktu pemberian bantuan ini selama 3 tahun, sedangkan bantuan berupa peralatan pendidikan hanya diberikan untuk sekolah-sekolah yang ada di sekitar industri penghasil gas alam seperti di Arun Lok Seumawe dan Badak.

Indonesia mendapat perhatian khusus, sebab cuma negara ini yang mendapat bantuan, sedangkan negara lain yang terkait dengan kontrak kerjasama dalam memasokkan gas alam tidak mendapat bantuan serupa," paparnya.

Dikemukakan pula, pihaknya sebenarnya tidak hanya memberikan bantuan seperti itu, namun ingin membina hubungan kerjasama itu dari hati ke hati secara lebih jauh lagi dalam berbagai bidang, guna mempererat jalinan kerjasama yang selama ini sudah berjalan dengan baik.

"Jadi jalinan kerjasama ini tidak hanya sebatas jalinan kontrak kerjasama bisnis, tapi kami ingin menjalin kerjasama secara lebih luas lagi dalam banyak hal," katanya lagi.

DIPERPANJANG

Rektor Unmul yang diwakili Pembantu Rektor 3 Prof Ir Endang Sastradimadja MAgr mengemukakan, sejak 1992 lalu hingga kini, bantuan yang diterima dari Yayasan Osaka Gas Company sudah mencapai Rp 52.850.000 dengan 140 orang mahasiswa penerima.

"Sedangkan mahasiswa penerima beasiswa kali ini 35 orang yang berasal dari 5 fakultas. Setiap bulan terhitung sejak September 1995 sampai Agustus 1996 mereka menerima Rp 35.000," katanya.

Endang mengharapkan pihak yayasan dapat memberikan bantuan lebih besar lagi, baik dari segi jumlah beasiswa maupun mahasiswa penerimanya. Hal ini ketika ditanyakan kepada Wakisaka dijawab bahwa pihaknya sementara ini tetap mempertahankan nilai beasiswa seperti yang diberikan saat ini, namun tetap memperpanjang bantuan untuk tahun-tahun yang akan datang.

"Kami berharap agar beasiswa yang tak terlalu besar ini akan tetap bermanfaat, khususnya bagi kelangsungan pendidikan para mahasiswa penerima dalam menuntut pendidikan. Sebab, abad 21 membutuhkan generasi muda yang memiliki pengetahuan dan kemampuan menguasai teknologi," ujar Wakisaka. (ri)

1995年 10月24日付
Suara Kaltim
(スアラ・カルティン)

「日本が必要としているLNG 大阪ガス国際交流財団が奨学金を与える」

サマリダ:日本は今迄と同様、インドネシアからのLNGを継続して要求している。

例えば、大阪ガスは約70%のLNGをインドネシアから供給している。

うち、50%は、バダック・ボンタンからである。

脇坂稔専務理事は、ムラワルマン大学の大学生の奨学金を直接に贈呈した後に、LNGは日本の産業や家庭生活にとって、とても重要な役割をもっていると言った。

大阪ガスは、大阪、京都、神戸とその周辺の約2,000万世帯にガスを供給している。

大阪ガスは日本で第2位のガス会社として1977年以降、インドネシアと共同契約をした。また、2011年までプラタナと契約している。

こういった関係から大阪ガスはこの財団を通して、優秀な大学生に奨学金を援助したり、小・中学校や高等学校の教育機材を助成している。機材とは、例えば、教育のために使う道具類、教科書、辞書などを指している。

その他、大学のために研究費用も助成している。その研究費用の助成の期間は約3年間である。また、教育機材の助成はアルンやバダックなどのLNGを生産する地域周辺の学校である。この援助はインドネシアのみが特別に与えられているものであって、他の国には向けられてはいない、と脇坂氏は述べた。

大阪ガスはこのような援助を与えるだけではなく、真に心と心をつなぐ架け橋になるような友好的な関係をつくりたいというのが本意である。この仕事は単なるビジネスの契約といった意味あいのものではなく、もっと広い意味でのつながりを意味しているのだ。

ムラワルマン大学のエンダン氏は大学長を代行して次のように述べた。1992年以来、大阪ガス国際交流財団からの援助は、約52,850,000ルピアになり、140人の大学生に奨学金として分配した。現在、奨学生を受けている大学生は5つの学部に在籍している35人の大学生である。1995年9月から1996年8月までに彼らは各月35,000ルピア受け取る、と述べた。エンダン氏はさらに、この大阪ガス国際交流財団からより多くの援助を期待した。その要求に対して脇坂氏は、援助の額は今まで通りと変わらないが援助する期間を延長すると答えた。

我々は、この奨学金が教育のために役立つことを期待している。なぜなら21世紀には、科学や技術の発展する新しい時代になることを切望しているからである。

情報 **ガスの**

大ガス国際交流財団が事業発表

大阪ガス国際交流財団（大西正文理事長）は16日、1996年度事業としてインドネシアの教育機関などに総額1200万円相当の奨学金や教育機材を提供すると発表した。小中高校へのテープレコーダーや地球儀の贈呈、高校・大学生への奨学金提供、バンドン工科大学など3大学への研究助成などで、個別に贈呈式を行う。

1996年 10月17日付 読売新聞



セレモニーで学生に直接手渡す協坂専務理事（中央）

大阪ガス国際交流財団（大西正文理事長）は10月、インドネシアの学校に教育機材や奨学金の助成を行った。助成総額は千二百万円。協坂専務理事が10月十三日から現地入り、約三週間かけて小中高に教育配布。日本語学習のテキスト



寄贈した「コモドのたび」

8.11.13

ガスエネルギー新聞

顔の見える交流を

インドネシアに助成

大阪ガス国際交流財団

用図書や地図、実験用具、コンピュータなどを寄贈したほか、三大学に実験研究の助成を、四地区百五十人の高校生・大学生に奨学金を授与した。またこころは金額を増やし、特別贈呈プログラムとして音楽童話絵本「コモドのたび」（篠原綾子作）の日本語版、インドネシア語版合わせて千冊を各学校に配布。日本語学習のテキスト

トとして、また国際文化交流の手段としても活用を促していく。

同財団は一九九二年の設立以来、毎年インドネシアのある学校に助成を行っており、地域の実情に合わせて助成対象を選考し、贈呈する教育機材を現地調達するなど地域に密着した活動が特徴。五年間の助成総額は約八千万円。

協坂専務理事の話 現地で はセレモニーだけでなく、学生との対話、大阪の街や大阪ガスを紹介したビデオの鑑賞など、顔の見える交流を心掛けています。基地周辺は教育や産業の発展が遅れている地域で、贈呈式に訪れる度にとても喜んでくれる。また偶然ですが、現地でコモドラゴンの子供が主人公の漫画が流行しており、贈った絵本は大変好評でした。感想文を送ってくれるよう頼んだので、とても楽しみにしています。

1996年 11月13日付 ガスエネルギー新聞

日本工業新聞 大阪ガス国際交流財団専務理事 協坂 稔さん

「大変喜ばれて、現場 どもたちに特別プログラムのニーズに応えたものだ」と実感しました」と話すのは、大阪ガス国際交流財団の協坂専務理事。

同財団は大阪ガスが天然ガスの供給国であるインドネシアに対して教育機材や奨学金の助成を行っている。このほど「音楽童話絵本」をインドネシアの子

た。この絵本は、音楽療法などで子どもの心のケアを行っている元養護学校教師・篠原綾子さんの創作で、

喜ばれた「音楽童話絵本」

同国が保護している大トカゲ・コモドラゴンの子どもが主人公。日本語版とインドネシア版の合計千冊を同国各地の学校に寄贈。国民的人気キャラクターの冒険物語とあって、小学生だけでなく、日本語を学んでいる大学生にも「楽しみながら、日本語が勉強できる」と人気。

今回の訪問で、「心と心のふれあいが深まっていることを感じました」と協坂さん。これからも血の通った交流を目指す方針だ。

1996年 12月19日付 日本工業新聞

大阪ガス国際交流財団 月に実施したチャリティは一九八年度の事業として、インドネシアの学校に教育機材、奨学金、試験研究費の助成を行なう。助成総額は約千四百万円。十月中旬から下旬にかけて、ボンタラ、ロースマウエなど各地で贈呈式を行った。

内訳は書籍やコンピュータ、スポーツ用品など教育機材の助成が約六百万円、高校生、大学生を対象とした奨学金が約二百五十万円、大学への試験研究費が約四百二十万円。

今年度は特別プログラムとして、同社社員が五

大阪ガス国際交流財団 「インドネシアへ助成」 教育機材など1400万円

基本財産（設立当初三億円、現在八億五千万円）を金割付、九二年に設立した。東南アジア、オセアニアの天然ガス産出国に対し、毎年一回、教育機材の提供や奨学金の支給、天然ガス関連技術に関する試験研究の助成などを行っている。

これまでの助成総額は今年度を含め、約八千八百四十万円。地域の実情に合わせた助成対象の選考や贈呈機材の現地調達など、地域に密着した活動として、地元の教育関係者から高い評価を得ている。

同財団は、大阪ガスが

1998年 11月4日付 ガスエネルギー新聞

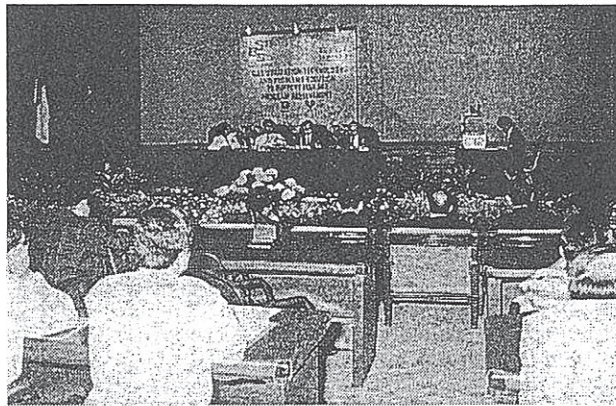
アジア 太平洋時代

わが国の天然ガス需要を支えるアジア・太平洋諸国と相互理解を深めるとともに、技術支援も目指して大阪ガスが発足させた財団法人大阪ガス国際交流財団（大阪市、理事長・大西正文・大阪ガス会長）のインドネシアでの活動が本格化している。大気汚染改善のため、インドネシア政府が打ち出した「ブルースカイプログラム」を、天然ガスの利用技術で後押しするセミナーを昨春秋、地元大学と提携して開催するなど国際貢献を進めている。（左山広二）

大阪ガス国際交流財団

大阪ガスは昭和五十年から必要で、地元の要望から石炭系ガスから天然ガスに沿って助成を行うことに転換する作業を始め、インドネシアからは五十二年からLNG（液化天然ガス）の輸入をスタート。平成八年度では輸入LNG四百九十六万バレルのうち三百十万バレルがインドネシア産（依図、地球儀、スポーツ用品など）を提供。これまでに教育機材に約四千万円を投

大阪ガス国際交流財団がスポンサーになり、昨年10月開かれた天然ガスの利用技術に関するセミナー。地元企業からも大勢が参加した



ブルースカイ計画

天然ガス技術後押し 研究や教材にも助成

インドネシア政府が進めるブルースカイプログラムは大気汚染の元凶となっている自動車排ガス

の測定を行うのをはじめ、高品位の燃料開発や自動車の使用制限、工場からの汚染防止まで法規制も含めて実施する広範な施策。地域によっては

WHO（世界保健機関）の指定基準の三倍も大気汚染が進行している深刻な現状がある。イオウ分が少なく、鉛の含有量が少ないガソリンや排ガス

プログラムを導入。財団はこのプログラムに天然ガスの利用技術の研究成果を生かし

の大阪ガス役員が天然ガスの利用の拡大をアピール。発表テーマ七件のうちインドネシア大からは、財団が助成した天然ガス仕様のバスの設計手法についての研究成果の発表が行われた。会場には日系自動車メーカーやエアコンメーカーなど、地元企業の関係者が多数集まり、政府関係者も出席。

「天然ガスの利用促進への関心の高まりがうかがえた」（協賛事務局長）という。

インドネシアで活動本格化

これは天然ガス転換を完了。これにちなみ天然ガス産出国との相互理解と友好関係を深めることを狙いに平成四年九月、同社が全額を出して財団を発足させた。

同財団専務理事の脇坂稔事務局長は「インドネシアでは教育機材不足が深刻で子供たちは自宅に教科書をもっていないほど。高校

じ、七百六十人に約千五百万円の奨学金を助成した。財団活動で最も注目されるのは天然ガス関連技術の研究助成。大学を対象に四十七件の研究に対して約千八百五十万円を投じた。

研究テーマは天然ガス自動車

の開発や自動車の排ガスが環境に与える影響など環境関連が目立つ。これは鉄道の未発達なジャカルタなどで自動車の渋滞による排ガス汚染が大きな問題になっているからだ。

脇坂事務局長は「三人以上を講じるブルースカイプログラムでは財団評議員役割を担っている。

1998年 1月25日付 産経新聞

UNIMAS to offer oil and gas engineering course

Borneo Post 2/17/2000



Yusuf (4th right), Kutsumi (3rd right), posing with the five recipients.

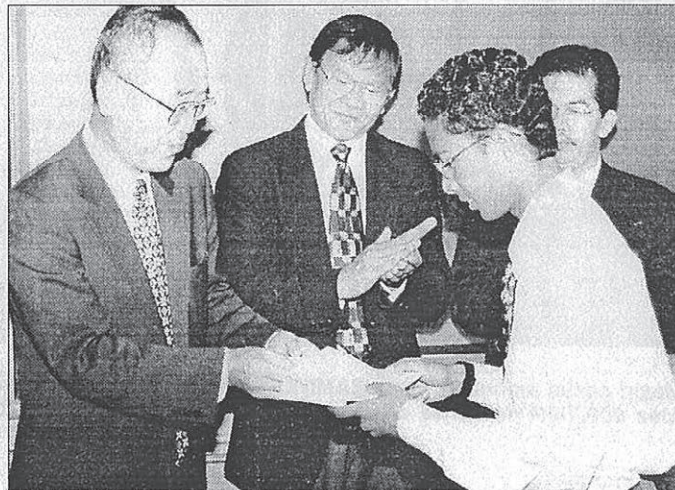
KUCHING, Thurs.-Universiti Malaysia Sarawak (UNIMAS) will be offering a new undergraduate programme in Oil and Gas Engineering through its Faculty of Engineering in the year 2003, said Deputy Vice Chancellor Professor Yusuf Hadi.

"The programme is timely as Malaysia's oil and gas industry will continue to grow in tandem with the ever-increasing energy demand," Yusuf said when speaking during the presentation of International Cultural Exchange Scholarships from the Osaka Gas Foundation to five of UNIMAS' engineering students here today.

Osaka Gas has been actively contributing to local community development by operating international exchange programmes between Japan and natural gas producing countries.

The Osaka Gas International Foundation of Cultural Exchange is the first of its kind to be established by a Japanese public utility corporation.

The foundation supplies educational materials, scholarships, and research assistance in natural gas technology to such nations.



Wan Mohd Shaham (right) receiving his scholarship from Kutsumi as Yusuf (centre) looks on.

Apart from the scholarships, the foundation will also be sponsoring the technical training of UNIMAS staff at Osaka Gas Research Centres.

Akira Kutsumi, the Executive Director said that the foundation, which was established in 1992, aims to provide assistance for research and development in the natural gas industry.

Natural gas is an essential energy source in Japan and is used in homes, businesses, and the industrial sector.

In 1999, about 50 percent of Japan's im-

ported energy came from Malaysia, mainly from the natural gas resources in Bintulu.

"We are proud to contribute to UNIMAS and hope that the university will become one of the leading institutions on natural gas research in Asia," said Kutsumi.

The five students who received the scholarships worth RM7,000 each were Wan Mohd Shaham Wan Mansor (Mechanical Engineering and Manufacturing Systems), Wan Sharuzi Wan Harun (Mechanical Engineering and

Manufacturing Systems), Abang Ahmad Salemi Abang Sulaiman (Mechanical Engineering and Manufacturing Systems), Kamarulzaman Mohamed (Electronic and Computer Engineering), and Rofina Ngau Tingang (Electronic and Telecommunication Engineering).
- BP

2000年 7月21日付
Borneo Post

LNGが結ぶ国際交流

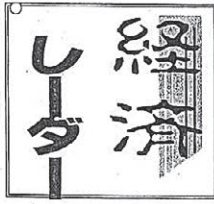
大阪ガスが連帯の奨学金

アチエ、カリマンタンの インドネシア人学生380人

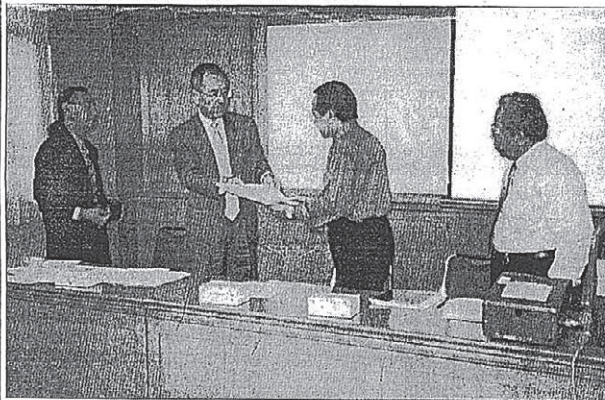
日本人にとって重要なエネルギーである液化天然ガス(LNG)の供給をインドネシアに依存している大阪ガスの国際交流財団(理事長・大西正文大阪ガス相談役)は、今年のインドネシア交流事業として、アチエ特別州と東カリマンタンの学校、インドネシア大学などに奨学金、教育機材、研究費など総額千三百四十万円を支援することを決めた。財団事務局長の九津見明さん(六二)が、三百八十人の奨学生の証書や、教育機材リストなど分厚い書類を持って各地の贈呈式に出席し、生徒や先生たちから大歓迎されている。

(星野晴夫)

九津見さんは大阪ガスの技術畑の営業マンとして海外で活躍。一九九三年から九六年、シンガポール所長だったところから、インドネシアとマレーシアへの教育支援事業にかかわった。石炭から石油へ、石油からLNGへと日本のエネルギーは転換してきたが、大阪ガスも一九九〇年、LNGに二〇〇%転化した。その七〇%をインドネシア産に依存することになり、当時の大西正文社長(現・財団理事長)が「モノの交流だけでなく、インドネシアと草の根交流を始めよう」と提案。「スポーツ交流、プロフットボール交流の修復支援などさまざまな



インドネシア大学で天然ガスの有効利用などに関する研究費の助成金の証書を手渡す九津見さん(左から二人目)



計三百八十人の奨学生の名前と、銀行口座番号を書いた分厚い書類が詰まっている。九津見さんは「奨学金が学生の手に確実に渡るには、どうすればいいのかわからない」と語る。大阪の銀行から現地の銀行に無事に届くシステム作りは「苦労しました」と語る。奨学生ひとり一人に手渡す証書、研究費を助成したインドネシア大学などの研究報告に対する会社側の評価を要する。

今回の奨学金の総額は、学生三百八十人に総額三百八十万円。一人当たり平均すると年間一万円だが、インドネシアの苦学生にとっては、年間の学費をカバー出来る貴重な奨学金だ。

■大阪ガス国際交流財団

大阪を中心に関西の六百四十万軒の家庭や企業にクリンエネルギー天然ガスを供給している大阪ガスは、その原料であるLNGの安定確保のため、産出国との相互理解を深める必要があると、一九九二年に設立。アジア・太平洋地域の天然ガス産出国の、中、高、大学への教育機材、天然ガスに関する関連技術の研究費、高校生と大学生への奨学金を支援する活動を開始した。外務省と経済産業省を主務官庁に八億五千万円を基本財産に、今年四月までの九年度に、インドネシアとマレーシアの奨学生約二千人をはじめ二百を超える学校、大学に総額一億二千五百四十万円を助成している。

■日本とLNG

一九七〇年代初め、インドネシアのLNGを日本へ輸出する事業で先駆的役割を果たした日商岩井ジャカルタ駐在員事務所によると、LNG取引は、数十年前という長期契約に基づいた信頼関係がきわめて重要なことから、家族関係に例えられる。日商岩井が仲介し、一九七三年、大阪ガスをはじめ関西電力、中部電力、九州電力、東邦ガス、新日鐵のいわゆるウェスタン・バイアーズが、ブルタミナと基本契約を結び、一九七七年、第一船が日本へ向かったのがインドネシアから最初の大型の輸出。以来、ポンタンとアルンで産出するLNGが日本のエネルギーを支え、二〇〇〇年の実績では、日本のLNG総輸入量約五千四百万トンのうち、インドネシアからの輸入は約千八百万トン(約三三%)を占める。また、インドネシアの輸出量約二千七百万トンのうち六五%が日本向けで、LNGを通じ両国が太いパイプで結ばれている。

ネシア大学、バンドン工科大学、ボゴール農業大学の三大学に、合計十一件四百六十万円の研究助成金を供与する。今回、マレーシアにも総額四百万円の助成を決め、サラワク大学工学部の学生十人に奨学金を支給するほか同大学の教官二人を日本に招いて研修を行う。

OGFICE Beri Beasiswa Pelajar

Jalin Persahabatan Antara Jepang dan Bontang

BONTANG—Untuk kesekian kalinya, Osaka Gas Foundation Of International Cultural Exchange (OGFICE) kembali menyalurkan bantuan beasiswa kepada siswa SMU Negeri 1 dan SMUN 2. Selain beasiswa, OGFICE juga memberikan buku-buku dan perlengkapan perpustakaan. Beasiswa dan bantuan buku senilai Rp304.545.100 dari OGFICE tersebut, adalah yang ke-11, sejak pertama dilakukan pada tahun 1992.

Menurut John Sunarmo, Chairman Of Bontang OGFICE, setiap tahun, jumlah bantuan mengalami peningkatan. Pada awal pemberian beasiswa, menurut Sunarmo hanya untuk 10 orang. Kini, jumlahnya mengalami peningkatan yang cukup signifikan mencapai 80 orang siswa. "Setiap peneri-

ma mendapat Rp40 ribu perbulannya selama satu tahun sampai selesai," jelas John. Selain kepada SMU, bantuan peralatan perpustakaan berupa meja, kursi, lemari arsip dan lemari buku juga diberikan kepada tiga SLTP dan 5 SD Negeri se-Bontang. Total bantuan buku pustaka Rp261.354.000.

Director/General Manager PT Badak NGL Bontang Bachtiar Efendi Soe'eb saat acara penyerahan menyatakan kekagumannya terhadap kepedulian OGFICE yang saat ini genap berusia 10 tahun. OGFICE selama ini memang menjalin kerjasama dengan LNG Badak untuk membantu sektor pendidikan, termasuk dengan negara-negara produsen LNG di dunia.

"Bantuan itu dari tahun ke tahun terus meningkat, khususnya

untuk produsen LNG di Indonesia. Bantuan itu bukan hanya sebatas hubungan bisnis murni yang terjalin antara PT Badak dengan Osaka Gas, tetapi lebih jauh lagi yakni bentuk persahabatan antara masyarakat Kota Osaka Jepang dengan masyarakat Bontang," katanya. Menurut Bachtiar, usia Osaka Gas masih relatif muda, tetapi sudah banyak melakukan tugas sosial. Bantuan beasiswa serta buku dan alat perlengkapan perpustakaan, menurut Bachtiar sangat besar manfaatnya, sebab akan membantu mewujudkan SDM Bontang lebih berkualitas, maju dan mandiri.

"Masalah pendidikan di Bontang masih terkendala minimnya fasilitas serta kondisi masyarakatnya yang sebagian tidak mampu me-



Mr Akira Kutsumi Executive Director OGFICE saat memberikan beasiswa kepada pelajar SMUN 1 dan 2 Kota Bontang.

neruskan sekolah. Berpijak pada kenyataan itu, PT Badak bertekad meningkatkan SDM Bontang dengan memberikan beasiswa, kepada siswa SD, SMP dan SMU.

Selain memberikan beasiswa, program peningkatan SDM, PT Badak juga melakukan pembangunan gedung sekolah baru, perbaikan

atau pemugaran gedung sekolah lama yang kondisinya memprihatinkan. "Kami yakin jika tiap tahun dukungan OGFICE teratur dan terus menerus, pasti akan mampu menjadi sinergi yang kuat bersama-sama PT Badak mempercepat peningkatan SDM di Kota Bontang," kata Bachtiar. (lis)

2002年 10月17日付 KALTIM POST

「大阪ガス国際交流財団が奨学金を支給」

日本とボンタンの友好を結ぶ

ボンタン—大阪ガス国際交流財団は、これまでも数度にわたり行ってきた奨学金の支給を、国立第一高等学校及び第二高等学校の生徒に対し行った。奨学金支給に加え、同財団は図書館の備品や図書の助成も行った。3億454万5千100ルピアにのぼる同財団の奨学金支給及び図書の助成は、1992年の同財団の設立時から数えて11回目のものとなる。

大阪ガス国際交流財団ボンタン側代表のジョン・スナルモ氏によれば、同助成は毎年増額されてきたとのことである。奨学金支給を最初に行ったときの奨学生数は10名であったのが、現在では受給者枠が大いに拡大され80名にも達している。ジョン氏によれば「各奨学生は毎月4万ルピアを1年間にわたり受給する」とのことである。さらには高等学校以外にも、机、いす、本棚、書類棚といった図書館備品をボンタンの国立中学校3校、同小学校5校に対し助成している。図書の助成は2億6千135万4千ルピアにのぼる。

パダックLNGボンタン社工場長のバクティアル・エフエンディ・スエップ氏は、贈呈式において、今年で10周年を迎える大阪ガス国際交流財団の配慮に対し賛嘆の意を表した。

大阪ガス国際交流財団は、これまでパダック社との協力により教育分野における助成を行ってきたが、こうした助成は他の液化天然ガス産出国に対しても行われている。

同氏は、「インドネシアの液化天然ガス産出地については、このような助成は年を経る毎に拡大されてきている。同助成により、パダック社及び大阪ガス間の関係は、単なるビジネス上のそれを遙かに越え、日本の大阪市とボンタン市民の間の友好関係にまで発展してきた」と述べた。バクティアル氏によれば、大阪ガスは比較的歴史が浅いといえるにも関わらず、既に多大なる社会的責務を果たしてきた。奨学金支給や図書館備品及び図書の助成は、ボンタンにおける人材がより優れ、熟達し、さらには独立したものとなることを助け、非常に有益である。

「ボンタンでの教育問題は、施設の不足と市民の間に学校を続けるだけの経済能力を持たない人々がいることである。この現状に鑑み、パダック社は、小中高等学校の生徒に対し奨学金を支給することにより、ボンタン市の人材向上に寄与したいと大いに考える次第である。」

奨学金支給、人材開発プログラム以外に、パダック社は新校舎の建築、傷んだ古い校舎の改築も行っている。「大阪ガス国際交流財団より毎年定期的かつ継続的な支援が得られれば、パダック社との協力体制による相乗効果により、ボンタン市における人材開発も大いに進むに違いない」とバクティアル氏は述べた。

キャプション：ボンタン第一及び第二高等学校の生徒に対し奨学金を渡す大阪ガス国際交流財団の九津見明専務理事

The Daily Jakarta Shimbun

2003年(平成15年)10月24日 金曜日 8

奨学金、資材、研究費

総額1230万円を贈呈

大阪ガス国際交流財団

江口さんがスマトラ、カリマンタン訪問

日本の家庭や工場にクリーンエネルギーを安定供給するインドネシアの人々に感謝の気持ちを伝えるようと、大阪ガスの国際交流財団(理事長・大西正文・大阪ガス特別顧問)が続けてきた教育支援は今年で十一年目を迎えた。同財団の江口洋英・事務局長(専務理事)は、十月初めから約三週間かけ、ジャカルタ、スタン、ボゴール、バンドン、バリックパン、ボントンなどスマトラからジャワ、カリマンタン島に至る広い地域の小中高校や大学を訪れ、奨学金、教育資材、研究助成金の三つの教育支援を実施した。地方自治の拡大で地方経済が徐々に向上基になっているが、「学校や大学は予算が少なく、われわれの教育支援への期待が高まっていることを実感した」と江口さんは語った。

金野雄夫



ボントン沖海上にある高床式の小学校の子供たちと交流する江口さん(中央)

今回、財団がインドネシアの教育機関に届けたい教育支援の総額は千二百三十万円。また、マレーシアの大学にも三百七十万円の奨学金などを支給しており、今回の支援総額は千六百万円。

■30人の奨学生リスト
江口さんのかばんの中には、インドネシア語と日本語の書類がぎっしり。各学校の児童の名前、奨学金の送り先の銀行口座など支払い記録、過去十一年の活動の記録などが記されている。貴重なお金が、奨学生本人に確実に届くように工夫したシステムが出来上がっている。援助にありがちな不正や不公平をなくそうという配慮だ。

■奨学金を増額
今年は、インフレを考慮して、奨学金を月額で一人当たり五千ルピア増やした。高校生は年六十万ルピア、大学生は九十万ルピア。インドネシア最大のLNG(液化天然ガス)生産地であるポンタンの高校生九十人を始め、アチエ特別州のロクスマウエの高校生百人とシヤクアラ大学の学生百人、東カリマンタン州のムラワルマン大学の学生百人の合計三百九十人に総額四百二十万円。

■ピアノ、ギターに大喜び
教育資材はポンタン地区の小中高十一校へ、バレー、サッカーのボール、卓球、バドミントンなどスポーツ用具、ピアノ、ギターなど楽器、それにデスクトップ・コンピュータなど、学校側が強く希望する教材を選び、総額三百三十万円相当を届けた。

ポンタン沖合の珊瑚礁に建てられた高床式の小学校(生徒数三千人)を初めて訪れた江口さんは「コンピュータが必要なのは、来年からは鉛筆やノートなど最低必要な教材を一人十万ルピア程度の予算で準備して、お届けしたい」と語り、子供たちを支援するため、お金の使い方をもう一つ工夫したいという。

■大学は研究費不足
大学生を対象とした研究助成金は、天然ガスの有効利用または環境対策に関する研究テーマをあらかじめ提出してもらい、審査の結果、寄贈するもので、今回は、インドネシア大学、パンドン工科大学、ボゴール農科大学の各大学四件ずつ合計十二件が対象となった。供与学額は四百七十万円。

「教育省からの予算が削られ、大学の研究室はほとんど予算がないと聞いた。学長や副学長からじきじきにお礼の言葉をいただいたのも、研究者が本当に苦労しているためだ」と江口さん。

江口さんは、今回初めて農業省幹部とも懇談した。大阪ガスは、将来、インドネシアでクリーン開発メカニズム(CDM)の一つとして「VANDU」を利用した熱帯荒廃地植林プロジェクトを検討しており、関係者の意見を聞いた。環境事業の面でも大学との連携を強めることになりそうだ。

このほか国際交流財団は、マレーシアにも奨学金などの教育支援を行っており、今回は四百七十万円を贈呈した。

■地球市民の活動
大阪を中心に六百五十万軒の家庭や企業にクリーンエネルギー天然ガスが供給されている大阪ガスが環境に優しいクリーンエネルギーを産出する東南アジアとオセアニアの天然ガス産出国を対象に実施。LNGの安定確保と産出国との相互理解を深め、地球市民としての活動する。

基本財産は八億五千万円。日本のLNG総輸入量(約五千万トン)のうち、インドネシアからの輸入は三割。インドネシアの輸出(約三千万トン)のうち六割が日本向け。LNGを通じて、両国は太いパイプで結ばれている。

2003年 10月24日付 じゃかるた新聞

大阪ガス国際交流財団

奨学金、研究費、教育機材

奨学金など2430万円寄贈

「される側」と向き合う援助

「今年もエグチさんがやって来た」――
めがねの紳士・江口洋英さん（六〇）は大阪ガス国際交流財団事務局長（専務理事）が、ジャカルタ、バンドン、ボゴール、東カリマンタン州のボンタン、マリンドナなどインドネシア各地の中小高
大学、研究機関を訪問し、奨学金や研究費、音楽・スポーツ機材を学生や学校長に直接手渡し、生徒たちと交流を深めた。クリン・エネルギーの液化天然ガス（LNG）を供給する資源国インドネシアへ「感謝の気持ちを込めた支援活動」を開始してから十四年。支援する側が「される側」と向き合いながら進めてきた大阪ガス独特の援助活動は、しつかりと根付いている。

草野靖志

「来年はアチエの現場にも」

今年インドネシアへ一奨学金はアチエロクスマ千九百十万円、マレーシア ウエとボンタンの高校生には五百二十万円を助成 アチエのシャークアア大学し、総額二千四百三十万円と東カリマンタンのアラワルマン大学の四百二十人の学生に四百九十万円。

このうちインドネシアの

学生に四百九十万円。



ボンタンの高校にエレキギターを贈呈する江口さん（左）

インフレを配慮し、高校から十万円に三〇％増額生の奨学金を月五万円に上げた。から六万五千円にアチエへ、大研究助成は、インドネシア学生は月七万五千円にアチエへ、大研究助成は、インドネシア

ゴール農科大、インドネシア科学院（LIP）に五百六十万円。教育機材支援としてボンタンの小中高など十校へスポーツ用品や楽器、コンピュータ機材など五百六十万円相当を寄贈。ほかにスマトラ沖地震の被災地へ三百万円を支援した。総額千九百十万円は昨年より三百七十万円増え、この結果一九九一年に支援活動を開始してから二カ国に贈った援助は累計二億二千五百万円に達した。

ここ数年、江口さんが気になっていたことがある。三年前、初めてインドネシアを訪れたときは、どの学校や大学でもトウリマカシ（ありがとう）とばかりの挨拶が返ってきた。最近、少しかつ小ざつとした江口さんは感じていた。カリマンタンのある大学での奨学金贈呈式では、奨学生百人のうち五十一人が欠席した。江口さんは「大学の誠意が薄れたのではないか」と大学当局に正直な気持ちを伝えた。

アチエ災害の被災者に寄せられた世界の義援金の一部が一年経つても凍結されたままとの話をジャカルタで聞いた。もしかしたら、学生たちに直接届いたの思いから、銀行送金をめくって苦勞を重ねてきたが、ようやく安定的に送金することができるようになった。インドネシアは改善がなかなか進まないなあと、思う反面、年毎に改善される面があるんですね」と感嘆の声を上げた。江口さんは来年もまた、インドネシアの高校や大学の新しい奨学生の名簿と銀行の口座番号をきつしり書いた書類を持って、再びインドネシアを訪れる。

アチエに和平が訪れたので、来年からメタンで関係者に会うのではなく、ボンタンのアチエの現場に直接入りまふ。私たちのさやかな援助が、アチエの大学の教育や学生たちに感謝されるという良いですね」と語った。



大阪ガスが8日発表し、大阪ガスが基本財にインドネシアを訪問したところによると、大阪ガス国際交流財団（理事長＝芝野博文・大阪ガス社長）は06年度の事業としてインドネシアとマレーシアに総額約2830万円の助成を行った。同

ガス産出国の教育支援
06年度は2カ国で実施

財団は大阪ガスが基本財にインドネシアを訪問したところによると、大阪ガス国際交流財団（理事長＝芝野博文・大阪ガス社長）は06年度の事業としてインドネシアとマレーシアに総額約2830万円の助成を行った。同

インドネシア・パンダアチエ地区では移動図書館の整備を支援した。8月にマレーシア、11月

2006年 12月11日付 電気新聞



インドネシアとマレーシアに助成
大阪ガス財団が総額2830万円

大阪ガス国際交流財団（大阪市中央区）は8日、2006年度事業として、インドネシアとマレーシアに総額2830万円を助成したと発表した。

インドネシアへの助成は教育器材の助成、奨学金支給、環境対策などの研究助成、移動図書館Ⅱ写真Ⅱへの助成などに総額2260万円。マレーシアには約2億5430万円になる。

同財団は東南アジアとオセアニア地域の天然ガス産出国に、教育器材を助成したり、奨学金の支給、天然ガス技術の研究を助成するなどを目的に1992年に設立。今回で累計助成額は約2億5430万円になる。

2006年 12月9日付 ビジネスアイ

日刊工業新聞
インドネシアなどに助成
大阪ガス国際交流財団 奨学金支給2830万円

大阪ガス国際交流財団（大阪市中央区、芝野博文理事長、06・6205・4700）は8日、06年度事業としてインドネシア、マレーシアに総額約2830万円の助成を行ったと発表した。

インドネシアには学校教育器材助成、奨学金支給、国立3大学への研究助成などを行った。04年のスマトラ沖大地震・津波災害に対する特別支援

として、被災児童への奨学金支給、移動図書館助成を実施した。マレーシアでも奨学金支給や先住民の小中学校に図書などの助成を行った。

同財団は大阪ガスが基本財産を全額出資して設立。東南アジア、オセアニアの天然ガス産出国への助成事業を行っている。92年度以来、15年間の助成総額は約2億5400万円となった。

2006年 12月9日付 日刊工業新聞

大阪ガス国際交流財団

初の語学研修生を受け入れ

43日間、日本文化に触れる

大阪ガス国際交流財団(理事長・芝野博文・大阪ガス社長)は今年、日伊国交樹立五十周年に合わせ、日本語短期留学制度をスタートさせた。今月五日、第一期留学生として大阪府、広島、京都、東京を訪れ、文化交流やホームステイなどを体験したインドネシア大学(UIN)大学院日本地域研究学科三年のヘルマワティ・クリスティアナさん(三三)と同学科二年のクルニアワン・ヘリーさん(二六)が、四十三日間の研修を終え、同財団の堀田真司事務局長とともにじゃかるた新聞を訪れ、日本での体験を語った。

岡坂繁寛

一九九二年に設立された同財団は、インドネシアやマレーシアなどの天然ガス産出国の中小高校と大学生に奨学金や教育機材を贈呈し、若手の研究者へ研修助成を続けている。

二人は十月二十二日から十二月三日にわたり、国際交流基金関西国際センターの日本語研修に参加した。同じ時期、別の交流事業で研修に参加していたインド人五人、インドネシア五人と合流し、原爆の資料が展示されている広島平和記念公園や京都の金閣寺、清水寺などを訪問した。

立命館大学を訪れた二人は、日本の大学生を前に日本語スピーチを披露。リナさんは「日本と外国人のかかわり」、ヘリーさんは「若

者と携帯電話」をテーマに日本語で意見を述べた。

京都では、二人とも、ホームステイを体験。リナさんは夫を一月前に亡くした六十四歳の一人暮らしの女性宅に宿泊した。「おばさんにお煮しめの作り方を教わりました。とてもおいしかったです。日本語で心を通わせることができうれしかったです」とリナさん。「日本では孤独死の問題が深刻化している。帰るとき、おばさんのことがとても心配だった」と語り、高齢化社会が

堀田事務局長(左から三人目)とともに大阪ガスの事務所を訪れたリナさん(左端)とヘリーさん(左から4人目)ら研修生

進んだ日本社会の問題に強い関心を抱いている。現在卒業論文に取り掛かっており、「企業と顧客の満足度について研究している」。

同財団は、インドネシアでは、東カリマンタン州ポンタンの中小高校への奨学金と教育機材の授与や、津波の被害を受けた州都バンドアチエで「移動式オートバイ図書館」の寄贈を実施。今年度の助成金支出の総額は二千九百万円に上る。

ポンタンの学校やジャカルタの大学を訪れ、奨学金や研究費、教育機材の贈呈する式や授業の見学を終えた堀田事務局長は「インドネシアで日本語を勉強している人が増え続けている。私たちができる教育助成支援として、日本で勉強したいと希望する学生たちの強い熱意に応え、今後も奨学生を日本に招きたい」と話し、少しずつ留学生の数を増やしていきたい」と語った。





天然ガス産出国との友好を築く

大阪ガス国際交流財団

2013年3月号examiner(イゲザミナ)「ZOOM IN」掲載文 抜粋

インドネシア、マレーシアそして東ティモール。天然ガスを産出するアジアの国々との親善と相互理解を深めるため、大阪ガス国際交流財団(OGFICE)では、20年前から教育・研究分野への助成事業を行なっている。

教育・学術・科学技術分野の助成を

「現地を訪ねた際に乗ったタクシーの運転手さんに『私はOGFICEからの奨学金のおかげで高校を卒業できました。感謝しています』と声をかけられたときは、うれしかったですね」と話すのは、大阪ガス国際交流財団事務局長の中島浩さん。長年、大阪ガスで天然ガス関連の事業に携わり、3年前にOGFICEの事務局長となった。

OGFICEとは、Osaka Gas Foundation of International Cultural Exchangeの略。内閣府から認定を受けた公益財団法人だ。

環境にやさしいクリーン・エネルギー、天然ガス。その産地である国々との相互理解を深めることを目的に、1992年9月に大阪ガスが設立。

これまでにインドネシア、マレーシアで、教育・学術・科学技術分野の助成を行なってきた。

- 活動内容は、
- ①学校等を対象とする教育機材の助成および生徒・学生を対象とする奨学金の支給
 - ②学術・科学技術分野の試験研究に対する助成
 - ③学生、教師、技術者および研究者の研修に関する助成
 - ④その他この法人の目的を達するために必要な事業の4点だ。

インドネシアでは6879人に支援を

「最初に支援をしたのは、インドネシアです。天然ガスの産地であるバンドアチェ地区の小学校や大学へは奨学金を。首都ジャカルタの大学へは試験研究助成金、ボンタン地区の小学校へは教育機材、そして高校・大学生へは奨学金を。サマリダの大学へも奨学金を贈呈するなど、20年間で総額3億8500万円の支援を行なってきました」と中島さん。助成した研究テーマは269件。支援した子ども、学生は延べ6879人に。中には、エンジニアや研究者、大学教師などの職に就き、社会に貢献している奨学生も多いという。

「地域の人々との友好関係を築くことを重視して活動してきました。奨学金などを日本から送り、ネットだけでやり取りをするという支援の方法もありますが、私たちは直接現地を訪れ、相手を尊重しながら話を聞き、食事をともにし、理解を深めてきたつもりです」と中島さんは続ける。

20年の間に、インドネシアは内乱を乗り越え、政権交代し、飛躍的な発展を遂げた。しかし、今も貧しい人々は多く、一般の人にとっては、日本は遠い国。「日本にあこがれ、日本で学びたいと、来日を希望している人々がたくさんいます。OGFICEの研修で日本に招待した学生や大学教師が、帰国して日本語や日本の文化、武道などを広めてくれているのもうれしいですね。私が訪ねていくと、小さな子どもたちも目を輝かせて迎えてくれるんですよ」。

年に数回、自ら各地の学校を回り、支援者との直接対話を心がけている中島さん。意欲的な子どもたちの姿は、まるで日本の高度成長期の映像を見ているようだ話す。

OGFICEでは、このほかマレーシアにも積極的な支援を続けており、クチンのサラワク大学へは奨学金を、遠隔地の小学校へは図書や学習用機器を提供している。

東ティモールでは国立大学工学部を支援

昨年、設立20周年を迎えたOGFICEでは、今年1月からの新たな支援先に、天然ガスの産地・東ティモールを選んだ。

かつてポルトガル領だった東ティモールは、インドネシアによる実効支配の時代を経て、2002年に独立。12年末までは、国連による治安維持や行政制度の基盤づくりなどの支援が行なわれ、ようやく本格的な国づくりが進められようとしている新しい国だ。

OGFICEは、JICA(国際協力機構)と連携をし、日本企業として初めて東ティモールの産業人材育成に参加する。

現地での調整にも尽力した中島さんは「これから国家として成長していく上で、中長期的な人材育成は不可欠です。そのため今年1月から4年間、東ティモール国立大学工学部の学生、毎年20人ずつに奨学金を贈り、毎年2名の教員に日本での短期研修を受けてもらいます。長期的な視点でこの事業は続けていきます。JICAさんには、東ティモールでのこれまでの協力実績や人的ネットワークを活かしていただき、現地での調整や事業を実施するうえでの支援をしていただきます」と話す。

1校しかない国立大学は、内戦時に校舎やキャンパスの一部が破壊され、教員用の建物はいまだに仮設のもので代用しているという劣悪な状況。たとえ入学できても卒業までの学費が納められず、中退をしてしまう学生が多いという。

「一人でも多くの学生に、安心して勉強や研究ができる状況をつくってあげたい」と中島さん。

資源国との友好関係を丁寧に築くことが、わが国のエネルギー問題解決の一助となり、未来への懸け橋になるに違いない。

(インターメディア)